

騎士団の姿がソルバークスの王宮から伸びるオーラッド通りに沿ってずらりと並んでいる。王国の各騎士団の特徴である様々な色の鎧が、王都の主要道路の要所に配置されていた。その景観は壮観とも言えるものでもあり、また、事態の深刻さも示唆していた。

北の大国、ジェスタールメント神聖帝国の宰相がラムシユタイン王国を訪れる前日、王都ソルバークスは喧騒に包まれていた。

ジェスタールメント神聖帝国はラムシユタインの北の国境と隣接しており、その版図を広げようと度々国境付近で諍いが絶えたことがなかった。ジェスタールメントは決して豊かな国とは言えなかったが、この二十年の間に豊かな鉱業資源を背景とした発展を遂げ、今ではラムシユタイン王国、バレンタイン共和国と並びランゴート大陸西域における列強の一角を担うほどまでになっていた。

その宰相が目下国境を挟み虎視眈々と狙っていると噂されるラムシユタインの王都を訪れる宰相の名は、ジョシユア・グーリツジ。その目的が物見遊山ではないことは誰の目から見ても明らかだ。

北の氷壁と擲掄される帝国の宰相、ジョシユア。その名が西域に知られるようになって三十年。建国より百余年が過ぎ、傀儡と化そうとしていたジェスタールメント皇帝を、名実共に帝国の君主として君臨させ、改めて神聖帝国として成立させた傑物。

齢六十にして今なお国の中枢に位置し、内外に様々な影響力を持つ帝国の実権を握る男。それが西域における彼への評価だった。

ジョシユアの今回の来訪目的は公にされていないが、ラムシユタイン国内でも様々な憶測が飛び交っていた。

曰く、三ヶ月前に終息した国境付近の村、ワレルでの帝国騎士団出沒事件の後始末。曰く、二国間に設けられた非干渉地帯撤廃条約締結交渉。曰く、東のヴォルダ皇国弱体化により活発化した東部振興国の侵攻を考慮し、設けられた同盟条約の見直し。挙げ句の果てには、ラムシユタイン王国の要人暗殺といった荒唐無稽な噂まで囁かれていた。

いずれも剣呑極まりない事柄だけに、王都での警備体制が嚴重になるのは仕方のないこととも言えるだろう。しかし、警備する側だけでなく、王都の市民までもが足が地に着いていないような騒ぎになっているのはいささか常軌を逸していた。

そんな喧噪の中にある、夕刻の市場を滑るような足取りで王宮の方へと進む影があった。シート・アンジェラ。彼女はいつも働いている うたかた亭 から王宮の方へと歩いている。その足取りは夕飯の買い出しにこつたがえす市場の人々など存在しないかのようにスムーズだった。できるだけ速やかに。そして、誰からの注目を集めることなく動く。それが生まれた時から彼女に仕込まれた技だった。

さすがに、店でいつも着ているフレンチメイドファッションではない。あくまでもあの格好は客の気を引く為にやっているものだ。実際、彼女目当てで うたかた亭 へと足繁く通いつめる客は多い。そんな格好で外を歩こうものなら人の目を引いてしまう。豊かなセミロングの黒髪とモデルのような長身のスタイル、そして少々きつめだがあどけなさを残したその容顔は、男性の目が釘付けになってしまっただろうことは誰にでも予想できる。

そんなシートが店以外で身につけるものといえば、いたって目立たず、かつ動きやすい服装が多かった。今日は黒のスリムスラックスに、少々丈を長くあつらえた紺色の上着だった。あまり西域では見かけないスタイルで、キースが東部から帰ってきた際におみやげとしてシート

のために買ってきたものだった。この辺りは人の気を引くことに聡く抜け目がない男だと言えるだろう。

王都と外界を区切る巨大な城壁の真ん中に穿たれた穴、正門から王宮へと伸びるオーラッド通りへと入り、そのまま王宮の手前まで進む。そこから右に折れ、緩やかな坂道を上って小高い丘にある古い教会へと急ぐ。心なしかその表情には焦りが影を落としていているようにも見えた。丘の上に立つ、ファイウィンズ教会。ラムシユタイン王国の建国時代からラムシユタイン一世をバックアップし、国教と認定されたアーケネム教の末端教会として古くからこの丘に建っている。アーケネム教の総本山であるアモット聖堂は王宮を挟んで反対側にそびえたち、このファイアウィンズ教会と対になるようにしてラムシユタイン王家を見守るような形を取っている。もつとも、ほとんどの市民はアモット聖堂への参拝を行っており、単なる末端教会として位置づけられているファイアウィンズ教会に来る信者はさほど多くない。平日の夕刻ともなればほぼ人影を見ることもない。その人気のない教会の扉へとシートが吸い込まれる。

シートは教会に入ると礼拝堂で軽く礼拝を済ませ、左手奥にある告解室へと向かう。告解室へと入ったシートは、告解を行う者が座るべき椅子へと座った。告解者と聖職者を隔てている緻密な透かし彫りが施された壁の向こうに影はない。普段ならば、告解に訪れる者に対してすぐにも教会の聖職者が対応するのだが、シートは向かい合う壁の向こう側には誰もいない。シートは誰もいない壁の向こうに向かって祈りの姿勢を取る。まだあどけなさの残る豊かな黒髪の娘が、天国を描いた緻密な彫刻に対して祈りを捧げている様子は、宗教絵画を思わせた。シートの中から告解の言葉が漏れた。

「どうやら、お持てなしが間に合いそうもありません」

シートの言葉が告解室の吸音機構へと消える。しかし、その内容は告解しなければならぬようなものなのか。それは告解というよりも、むしろ誰かに対する報告のような口調でもあった。しかし、それにしても店の準備といったものを、教会の誰に報告するというのか。

「北の一行は明日にでもソルバークスへ入ろうかというところまで来ています」

「予定よりどれほど早まったのですか？」

不意に男の声がした。壁の向こう側にいつの間にか人影が現れていた。透かし彫りの天国を通して見る影は確かに聖職者のシルエツトだ。しかし、ドアが開いた音も気配もなく、どこから現れたのか。シートは驚いた様子でもなく、その男に報告をし続ける。

「予定では、3日後というお話だったのですが」

「なるほど。間に合いませんか」

男の声は柔らかく物腰が低いことを伺わせるが、どことなく威厳に満ちて聞く者を圧倒する力があるように見える。堅く引き締まったシートの表情からも、この男がただの聖職者ではないことが伺い知れる。

「はい・・・いかがすべきでしょうか」

「現状の力でなんとかするしかありません」

「キースはなんとか間に合いましたが、他の者の集まり具合は、あまり・・・」

「それも仕方ないことでしょうか」

「はい・・・」

「確かに北のお客様はなかなかの難物です。しかし、あの人がこの国にやってくるからと言って、すべてのお供を携えて来るわけでもありません。そこまで心配することもないかと」

「しかし、天井に住み着いた蜘蛛も追い払ってありません」

「分かっています。本来であれば、蜘蛛の種類を見極めて優先順位を決めるべきだとは思いますが、明日お客様が来る以上そうも言っていられませんか」

「やはり、来客に合わせて蜘蛛も動き出すのではないかと」

「一番気をつけなければならぬことは、蜘蛛の動きに気を取られすぎて、お客様の対応が疎かになってはいけないということです」

「逆に、お客さんへの対応ばかりに目を向けすぎて、蜘蛛の動きを捕捉できないということもありますから」

「もちろんですよ。北の本当の狙いが分からない以上、どちら側への注意も怠れません」

「本当の狙い……」

「まだ、最高のもてなしをできるだけの食材が揃っていないのでしょっつ、」

「はい……」

「そして、その食材はおお客様の到着に間に合わないかもしれない」

「おそらくは……」

「であれば、今ある食材でなんとかするしかない」

「分かっております」

「見えない蜘蛛の方に力を注いだところで無駄な労力を消費するだけだと思います。まずはお客様をよく観察することによってその次の動きを予想すること。そうすれば蜘蛛の動きもある程度は捉えられるのではないかと思います」

「そうですね」

「キースにも伝えて下さい。もてなしには万全を尽くすようにと」

「畏まりました」

シートはそう言って席を立った。

「神のご加護がありますように」

男は壁の向こうから祈りを捧げた。

「ありがとうございます」

シートは丁寧に礼を返してから告解室を後にした。

「んで？どうだった？」

キースがグラスを磨きながら聞いてくる。シートはつまらなさそうにカウンターのストウールに腰掛け、足をぶらぶらさせながら天井を見上げている。

うたかた亭。夕刻には近く、開店状態にはあるものの、まだ客は入っていない。今日はいつも早い時間から入り浸っているガストもない。恐らくは、明日この都を訪れる北の氷壁宰相を迎えるための警備強化で、遅くまで都の警邏に駆り出されているのだろう。

「現場でなんとかしろってさー」

腕を頭の後ろで組み、天井を見上げたままシートがつぶやく。

「現場の人手が足りないからって お代わり お願いしたって聞いてちゃくれないわねー」

そんなシートの言葉に苦笑しながらキースが答える。

「人手が足りないのはどこも一緒やる。ま、オレ等がちょっと特殊なせいもあるけどな」

しかし、シートはそんな慰めにもならないようなキースの言葉に力チンとしてしまう。

「特殊だったって、そんなの言い訳にもならないわよ。第一頭数揃えられないくらいだったら組織としても成り立たないわけじゃない？そんなもんが組織だの騎士団だのちゃんちゃらおかしいわよ。それこそ頭で茶が沸くってなもんよ」

「おいおい、腹が立つのはわからんでもないが、言葉に気をつけるよ」

「わかっているわよ。そんなこと」

「それにな……」

キースは突然深刻そうな顔になり、ちょいちょいと手招きしてシートへと顔を近づけた。「なによ？」

シートもキースの深刻そうな表情につられ、思わず身を乗り出す。

「茶が沸くのは頭じゃない。腹だ」

深刻そうな顔をしたキースの口から出てきた言葉はまったくどうでもいいようなものだった。シートが綺麗な眉をひそめてキースを睨む。

「なにかな？」

キースは再び何事もなかったかのようにグラスを磨きはじめていた。その様子を見てシートは怒ることすらバカバカしくなり、投げやりに溜息を吐く。

「頭だつて腹だつて似たようなもんよ」

「頭と腹と一緒にされちゃ胸が可愛そうだよ」

「なんでそこでいきなり胸がでてくんのよ。全然関係ないじゃない」

「全然関係ない。だがしかし、お前の胸が可愛そうだつていつてんの」

シートが一瞬虚を突かれたように自分の胸を見る。確かにシートの胸は豊かだとは言えない。そのことを示唆しているのだと気づいたシートは真っ赤になった。

キースへ向かって靴が飛んできた。シートはモーションが全く見えない恐るべき動きだった。キースは避けようと身体をずらすのが、自分が避けると後ろのグラス棚が壊滅することに気づき、殺人的スピードで投げられたシートは靴を片手で受けた。

「確かに今のお前だつたら、頭で茶が沸くな」

「どういう意味よ！」

「頭冷やせつてんの」

グラスにたっぷり氷を詰め込んだ水がシートの前に差し出される。

シートは憤然としたまま、受け取ったグラスを一気に煽って口の中に流し込んだ。中の水と一緒に大量の氷も流し込まれてしまう。シートは全く気にするでもなく、口の中に入り込んだ氷をバリバリと噛んでいる。このままキースの頭まで嚙つてやるうかとも言わんばかりの勢いでバリバリバリ噛んでいる。

「問題なのは、この物騒な時期に訪問を強行しようとするお客さん一行ってわけか」

綺麗に磨き上がったグラスを窓から入る夕日に透かしてみる。曇り一つ無いその出来映えに

キースは満足する。調子は悪くはないようだ。

「困ったことに、全然まともな情報が入ってこないんだよなあ・・・ま、あいつ相手だといつものことではあるんだが」

流言飛語の類が跋扈しすぎてどれが本当の情報なのか判断することは困難を極めた。

「なんでこんな不安定な時期を狙ってやって来るのかさえ分かれれば動きも予想できるんだが。ま、それができればこれほど苦労はしないわな・・・」

キースは返事もなくやけに静かになったシートを振り返る。彼女は氷の食べ過ぎで頭痛を引き起こしたらしく、頭を抱えてもがいていた。